

ひとり裁ち縫ひの業は、よく習ひよく練る

「九里裁縫女学校」(現在の九里学園高等学校)は明治34年(1901)に米沢市越後番匠町(今の幸町)で創立されました。校長の九里とみの教育方針は新しい時代に即した女子の道として職能技術習得を第一とし実用の学問にしぼり、徹底して指導することになりました。

今回、九里裁縫女学校の生徒の一人が在学中に制作した23点の資料を展示する機会に恵まれました。資料をご覧いただき、当時の裁縫技術の学び方や、学校において技術や知識をひたむきに学ぶ女学生の姿を感じて頂ければと思います。



↑2. 本裁女物単衣本重ね

2点とも麻の生地です。麻の織物は肌触りが快いため夏物の着物として重宝されました。

本重ねは着物の裏前面に裏地があり、半重ねは下半分のみ裏地があります。



↑3. 本裁女物半重ね

一ツ身とは1~3歳まで着る着物のことです。注目していただきたいのが着物に付いている紐です。子供は動きやすいので簡単に着つけが出来るように付け紐を付けます。

紐の付け根に施されているのが「付け紐飾り」です。本来は魔除けでしたが、明治時代くらいから装飾的意味合いが強くなりました。この飾りは祝い着やよそ行きの着物に施されます。



↑4. 一ツ身単衣本重ね